

日本芸術文化振興会ニュース

7

国立劇場公演ガイド 芸術文化振興基金情報 新国立劇場情報

1000

字エッセイ

「レガシー」再考

小野木豊昭

各種邦楽や日本舞踊など、全国各地の学校で行う公演やワークショップの中で気付くことがある。地域の祭や芸能に向き合っている子供たちと都市部の子供たちの反応の違いである。年齢や公演形態にもよるが、「当たり前」のものと「受けておめでとう」の差が、縁遠い特別なものとして構えているか、如実に顕れるようだ。

今春、富山の曳山祭りを訪ねた。中でも印象に残ったのは砺波市の出町子供歌舞伎曳山だ。演じられてきたのは義太夫狂言で、今年の演目は「恋女房染分手綱」「重ノ井子別れの段」。相当稽古に励んできたであろうことが窺われるすばらしい演技。浄瑠璃を語るのは地元漆器屋さんと料亭の若旦那で、浄瑠璃談義に火がつくと止まらない。

そして南砺市城端の曳山祭り。見事な彫刻や金属工芸が施された山車を曳く男たちも凛々しいが、その前を行く「庵屋台」の中で演奏される庵唄に心惹かれる。絹織物の交易を通して富山の山奥にまで伝えられた江戸端唄の流れをくむ庵唄を伝承するのは、主にまちを支える若者たちだ。祭や芸能が「地域への求心力」として機能していることに気付かされると共に、こうした地域でこそ「伝統文化」を受け入れる素地が育つのではないと思われてならない。

「伝統」とは何か。「過去に生まれたすばらしい表現や作品で、時代を経て、言葉が異なっても、受けとめた人々の胸に響き、明日を生きる精神的な糧となるもの」と踏み込んで解釈し、その再認識から始めたい。明治以降多くの外来文化が流入し、この豊かな社会を構築するために多大な影響

を与え続けてきた。この事実は享受しつつも、「伝統」という価値への共感と共有こそ今の社会に不可欠なのではないか。私たちには「(西)洋服」を着て生活をしている日常がある。既に後戻りはできない。同時に伝統文化に携わる私たちも、伝統芸能をいかに「カッコよく、楽しく、面白く、刺激的に」しかも間断なく世に問い続けられるか、「伝統」という言葉の真の意味を常に考え、社会に向けて丁寧に発信し続けて行くことこそ、その答えにつながるものと信じて止まない。

二〇二〇年は通過点でしかない。「伝統文化をも確かな基盤とする文化立国」の姿を今こそ明確に描き、時間をかけて着地点に向かう覚悟が必要だ。期限付きの結果を目指して、簡単、便利、更なるデジタル化が最優先とされる「経済の論理」を価値観とするビジネスモデルとは対極の世界でもある。だからこそ、国や自治体の文化事業が普及・振興にとつて最大のパートナーなのだ。近未来に例えば「生徒の半数は和楽器や日本舞踊などを習う」学校が普通にあるなど、「伝統文化が日常当たり前に根付いている社会」の実現こそ、「レガシー」に相応しいのでは、と大真面目に考えている。



おのぎ とよあき
 「古典空間」主宰。伝統芸能共
 プロデュース。各地の立案、手
 ホール自主事業のイベントを
 学校公演、各種講師を務め
 掛ける。大学、講義、取
 組む。船橋市文化芸術公
 共ホール、ネット、東京都
 アドバイザー、東京都
 ビック文化プログラム
 会専門委員。

